井上頼文教授と日本考古学（二）

藤井直正

神宮皇学館にあって、神祇・古典を講ずるかたわら、考古学の研究を進められ、中でも伊勢国の古代遺跡と出土遺物に強い関心を示されていた井上頼文教授の業績については、大手前女子大学に寄託されている関係資料を紹介しながら前稿にくわしく述べた。

これまで、考古学界において、井上教授の諸業績はまったく顧られることがなかったが、それは教授ご自身が、その研究成果を発表されることが少なく、また収集された資料も公開される機会がほとんどなかったことに起因しているのであろう。

前稿は、そうした意味で、教授ののこされた業績のかずかずを、日本考古学史の一頁に加えることに主眼をおき、教授の小伝、教授の考古学に対する考え方と方法論、さらに伊勢国の古代遺跡の研究にのこされた足跡を、資料をふくめてたどったのであるが、本稿はそれにつづくものである。

「井上氏旧蔵資料」のうち、井上頼文教授ののこされた資料、中でも筆稿の中には二つの紀行文がある。一つは『二見の古墳墓』、いま一つは『國崎のつと』と題されている。どちらも草稿のままで、発表される機会はなかったようであるが、前回にくわしく述べた、教授の遺跡・遺物に対する見方・考え方、さらに教授ご自身の野外調査のあり方を知る上において貴重であるばかりでなく、明治時代における伊勢・志摩地方の様子が書き記されていることから、地誌としても重要な文献である。といっても、ふつうの紀行文ではなく、踏査旅行の記録と言った方が正しいのかも知れない。教授の業績は、このように各地の遺跡を実際に現地に赴いて調査し、各所に所蔵されている遺物をつぶさに実見するということが大きな比重を占めているが、その具体的な実践記録ということができる。まず原文を掲げ、若干の解説を試みることにしたい。

國崎のつと

十二日晴

○十三日晴　午前八時磯部[1]に行かんとてたちいで、大津濱を過ぎ劔ヶ崎を左に見て山越へ海岸を縫ひて相差[2]の学校の前ニいで梵潮寺[3]を右に見て畦蛸[4]に至り瀬崎文右衛門同男楠太郎氏を訪ふ。楠太郎氏不在ナりき。文右衛門氏の按内（マヽ）にて、隣切（マヽ）なる西明寺[5]にて時頼と称する木像[6]を見る。二寸五分計の坐像にて錫杖を持てり。恐くらハ（マヽ）此寺開起（マヽ）の像ならんか。西明寺玄関ニ清江山といふ額[7]かけたり。筆者ハ得山書と記せり。隷書なり。それよりより（マヽ）山を越え堅子[8]にゆく。文右氏の按内なり。より山（又よりのさきともいへり）の下に、より田といふ田あり。よりは、ときよりの略語なりといへと如何あらん。西明寺の西ももと最に作れりと。又西明寺の本尊なる阿弥陀佛ハ、この像を畦蛸に持ちて行けといえるまゝに、舟人ともに乗せ来りしものにて、持ちゆけと命したる人ハ何人なるか知られすといふ。又より山よりいでたるかけ壺一口、瀬崎氏の所蔵たり。（図）丘陵を過ぎて千賀の渡[9]を渡る。ここにて朝鮮土器[10]の破片一個を得。千賀の阿弥陀堂[11]を訪ふに荒廃して物置の如くなれり。堅子村宝珠庵[12]を問ふ。庵主病重く什器を見る能ハず。住僧のみとりにとて来合せたる千賀の農、片山駒吉といふ老人の曰く、先年田圃の小高き所を堀（マヽ）りたるに、素焼の瓶と古鏡一面とを得たり。瓶は破りて棄てたれと鏡は今に所持せりと。又同村に城山清八といふ人ありて、こゝより磯部の新道まで案内者を雇ふ。此の案内人ハ唖者なり。海に沿ひ漸く堅子峠を越るに道甚たあしく、薬研の如くくほみて水満ちたれば、恰も一條の川の如し。避けんとすれバ左右は荊棘おひしげりて、衣服にからみて水中を行かざるを得ず。髄までひたりて漸く新道に出づ。新道に出づれば電信柱接続せり。こゝまで案内料を与へし

1　いそべ、志摩郡磯部町の中心地。**2**　おうさつ、鳥羽市相差町。**3**　臨済宗南禅寺派の寺院。**4**　あだこ、鳥羽市畦蛸町、的矢湾に面する集落。**5**　臨済宗南禅寺派の寺院。最明寺入道北条時頼は、この地の風景が鎌倉由比ヵ浜に似ているのを愛し、その状景を歌に詠じたという伝承がある。**6**　現在も西明寺にまつられている。**7**　西明寺の山号である。**8**　かたこ、鳥羽市堅子町。**9**　せんが、畦蛸と千賀・堅子の間には小湾が入り込んでおり、昔は舟で渡ったのであろう。**10**　いわゆる須恵器のこと。**11**　志摩地方には阿弥陀堂をもつ集落が多い。**12**　臨済宗南禅寺派、現在は宝珠寺となっている。

に、頭を振りて其の意を得ず。辛くして多きに過ぐればあまりを返さんといふ意を吃ることを得たり。改て与ふへハ篤く謝意をあらはして傍なる小高き岩上に昇りて、おのれが行く後影を見おくりたり。川廻り路轉して見ること能はさるまで宇立せるさま質撲なる状見えてなかなかに□□はまされりける。左右に岐路あり。左方に板橋あり。この橋を渡れば的矢[1]なりといふ。右に折れて電柱をつたひて山田村にいで、磯部上之郷[2]に着き磯部郵便局長なる人の父赤坂直次郎氏を訪ひ、谷川清吉氏を問ひて上代遺物のことどもを尋ね、医師南太郎氏を訪ひ、伊雑宮[3]に参拝す。この宮はし畏々しく皇太神宮の遥宮にして、参集所詰勤務として松木時彦・田尻盛之・津田長平氏出任せられたり。それより穴川に行き、磯部村役場の門を過ぎ、畷道を行けば、林玄沖翁の碑[4]、雑草繁たる中に立てり。川鍋の橋を渡れバ○佐義長神社を遥拝して穴川[5]に行き、米奥覚三氏を訪ふ。今宵安心庵[6]といふ禅寺に初盆の祭ありて死者の冥福を祈らん為め村の内ハ更なり、隣郷の人ともをも召集して酒食を与へ後庭上にて跳(マヽ)らしむるなりと行て見るに聲よくおもしろき音頭とりあらねばなど酔しれ人のつぶやきて(マヽ)跳らむ。はなししからねバ米奥氏方へ帰りそれより伊雑宮の前なる旅店よしかと屋に一泊す。中世古睦夫氏こゝまで送り来られたり。寝につきしハ午前一時過なりけり。

○十四日晴　伊雑宮ニ参拝し、赤阪、南、両氏を訪ひ、谷川清吉氏を按内(マヽ)者として再ひ穴川の米奥氏を訪れ、中世古睦夫氏も来りて待ち合せり。再ひ安心庵に行きて、住職金子梅樹を訪ひ、穴川の名物なる鰻調理すぐなれバ中食すましてよと懇ろにいはるゝまゝに、とかくしてくさ〳〵のためつものゝ食をうけていでたつ。米奥氏と中世古氏はかはる〴〵舟の櫂あやつりて飯濱につけたり。こゝは、豊受姫尊[7]の自ら米を炊きたまへる所とて口碑ニ伝へたる所ありと聞けば、事実の正偽ハとはざるも、古代の遺物やあると、村の児童を按内(マヽ)として、カシタリを尋ぬ。樹木翳欝の中に天然の小川の水溜あ

1　まとや、志摩郡磯部町的矢、的矢湾に面する集落。**2**　いそべかみのごう、磯部町上之郷。**3**　〃いざわのみや〃または〃いぞうぐう〃と読む。伊勢神宮の別宮（べっくう）の一つで、古くから伊勢神宮の遥宮と称されており、ご祭神は天照皇大御神御魂とされている。垂仁天皇の御代、倭姫命が御贄地を定めるために志摩国を巡行された際、伊佐波登美神が奉迎してこの宮をつくり、天照大神の御魂を祀ったのがはじまりと伝えられている。伊勢神宮と同時に遷宮が行なわれ、毎年六月二四日に行なわれる田植祭は有名である。**4**　寛政七年（一七九五）穴川に生まれた。幼名を半次郎といい、通称玄沖、字を忍種、杏園と号した。一七才の時医学に志して江戸に出たが、偶々伊豫国今治藩主の侍医林玄曠に見出されてその養子となった。天保九年（一八三八）幕府の医官となったが、後辞して伊勢山田に帰って県政に参加し、さらに郷里にあって子弟の教育にも功績をのこした。明治一一年（一八七八）八四才で没した（『磯部郷土誌』を参照）。**5**　あなかわ、磯部町穴川。**6**　曹河宗の寺院。**7**　伊勢神宮外宮の祭神である豊受大神のこと。

り。遺物の存在を見ず。それより小河江（カガエ）[1]の笠取山なる鳥居氏の旧墓地ナル山嶺ニ昇る。最も険阻ニシテ甚荒蕪セリ。もと頂上ニ五輪石ありしを児童等が悪戯にて谷底に投ぜりと。近年迚ハ鳥居氏ノ徳を慕ひ山下をよぎる者ハ笠を取りて拝みたりと云ふに今ハ省る者なし。嗚呼。こゝに米奥・中世古の両氏ニ別れ、谷川清吉を按内として海つたいに行くに、断岸或ハ荊棘ニ隔テラレ進ム事能ハズ。辛くして飯バマヨリ舟に賃金を出して乗りて的矢港ニ着キ、鮨嘉ニ小憩、午後四時頃船ヲ傭ひて畦乗（マヽ）[2]ニ着キ國分寺[3]ニ向ふ。途中既ニ日暮、行人絶え凄然たり。漸く國分寺に着き、刺を通じ當寺ニ一宿す。住職前田義龍氏懇待し、深夜まで談話す。

○十五日晴　國分寺境内より発掘せる瓢玉時代の遺物[4]を見る。こは天保十四年六月八日より十二日迚ニ掘出せるものにて小字クスンド山といふ所なりと。

（図）

別に古瓦二箇[5]あり。古昔堂宇の巍然として建てりし所の跡にて、現今の本堂より二町程背後ノ地ナリト云フ。瓦質ヲ見るに鎌倉以後ノ心ちす[6]。現今堂宇ハ中世移シタルナリ。當地ヨリ巽ノ方ニ、今モ、ミダウノウシロといふ所あり。クスンド山ハ、ハライド[7]より三丁計隔たりたる地なり。

午前九時頃國分寺を出て甲賀（カフカ）[8]ニ至る。凡十六町ありと。甲賀より志島（シジマ）[9]の海蔵寺[10]に行く道程凡十二町餘ありとぞ。村役場ニ至リ、柳沢豊助氏ニ面會す。同氏ノ談るに、昔、志島ニハ大古墳十二ありしが、今ハ只石廓の暴露せるもの壱をあますのみと。可惜。この石廓を里人ハ人穴といふ[11]。

墳上ニ村界ノ石標高く立てり。（図）深さ凡五間餘、高サ八尺餘ありといふ。雑草繁り廓内ハ暗ク入口ハ半、土ニ埋れ濕気鼻を襲ふ。入りて調査せまく欲すれど身体ニ大害を招かん事を恐れて止みぬ。

1　現在は小海と書く。的矢湾が西方伊雑ノ浦に向かって細く入り込んだところの北岸にある集落。先年、この地の製塩遺跡が岡山大学の近藤義郎教授によって発掘調査され、その報告書『小海』が刊行されている。**2**　畦乗は安乗の誤り。あのり、志摩郡阿児（あご）町、的矢湾に突き出した半島上にある。**3**　天台宗、阿児町国府（こお）にある。奈良時代創建の国分寺の法灯を継いでいるが現寺地は旧地ではない。旧地は本文中にも記されているように、現在地より約二〇〇メートル北方にあった。応仁元年（一四六七）兵火に罹り、同六年（一四七三）現地に移転した。現在の寺観は天保一五年（一八四四）に整えられたもの。本尊薬師如来は行基の作と伝えられている。**4**　現在の国分寺にも多数の遺物がそのままのこされている。**5**　国分寺に所蔵されている古瓦は筆者も実見したが、井上教授がこの時見られたものと同じであるかどうかはわからない。**6**　筆者の見た限りでは鎌倉以後に下るものでなく、国分寺創建当時の奈良時代の屋瓦である。**7**　片仮名で記されているが「祓戸」の意味であろう。**8**　こうが、阿児町甲賀、大王崎まで延びる太平洋に面した集落。**9**　しじま、阿児町志島、

あごの海岸にて浪打ぎはを去る事僅に半町ニ満たず。柳沢氏、志島村内なる遺物所持の家々ニ案内せらる。

同村上村角内氏ノ家ニ左ノ遺物を所持せり。

（図）

賀茂村高等小学校長鈴木弥太郎氏、志島の古墳発見物を採拾して大学に送りたり。甲賀尋常小学教員岡藤四氏も柳沢豊助氏と共ニ志島ノ古遺物を大学ニ送りたりしが、途中にて多く破壊せりと。今より凡七八年以前なりきと。崎手の役場ニ長持壱棹程瓶玉時代遺物を保存せり。出所は崎手の道路改修ノ時ノ発見ナリト。志島ニ嘉二郎とて旧家あり。こゝにも数多所持せるも近代家道衰頽賣却せる品多く、且つ人ニ見せることを欲せずと。○志島の角力取にて大ひゞきと云ふ者、遺物多く発掘し、縁下ニ迫充満したる程なりしが、同人歿後如何所分せしや詳かならずと。遺族或ハ縁家ニ依て問ふも要領を得ず口惜し。

（図）

大学より巡見の人、千五百年以前の品也と云へりきと。大学の誰なりしか問へど、氏名を失念せりとハ残念なり。おのれハ五百年ハおまけと見たり。

浪切[1]と船越[2]との間に七本松といふ所あり。こゝに里俗天智の陵と称する古墳ありと。○御座[3]に、大江の千里の俚伝とクロモリの祠とあり。○越賀[4]と御座との間ニ人穴と称する石廓暴露せる古墳三つあり。廓内ハ八畳敷計にて入口は東に向ひ、天井石ハ廣大ナリと。○名切大慈寺[5]に地獄變相図あり。○御座潮音寺[6]にも同大幅ありと。二箇の有孔土器を携へて國分寺ニ帰り昼食を喫し、舟にて渡鹿野[7]ニ渡り、いろは楼主人見瀬弥助が持てる平家の遺物とて三尺餘の古刀を見る。同人四十四歳の時、西濠同上。**10** 曹洞宗の寺院。**11** 太平洋に面した台地上に多くの古墳の存在していたことがわかる。

1 なきり、現在は波切と書く。志摩郡大王町、大王崎のあるところとして有名である。**2** ふなこし、大王町船越、波切の西方に当たる集落。**3** ござ、志摩町御座、先島（さきしま）半島の西端、英虞（あご）湾に面した集落。**4** こしか、志摩町越賀、御座の東南、先島半島の太平洋岸にある集落。**5** 臨済宗妙心寺派の寺院。**6** 臨済宗南禅寺派の寺院。**7** わたかの、志摩郡磯部町、的矢湾の中央に所在する島。

州ローバクベーに漂遊し夜光貝の如きものを持ち帰れりとて示す。蒼白く光澤あり、此貝にて種々の細工ものを造るとぞ。テフガイと称すとぞ。かゝる程に忽然として酒肴の左右に陳列せらるゝを見る。これ客人と誤認せるに依ると。こゝに於て江戸兒根性辞する事能ハず。徒に無益の料物を費したり。然れど物品に比してハ安値なりき。舟にて的屋（ママ）ニ着シ、すしかに宿す。入夜、すしか主人村田寅吉、的矢高等小学校長小山榮磨、区長植田楠松、医師林進一、同男竹亮の五氏来りて深更迄談話す。小山氏ハ御巫清直氏[1]の講説をしば〳〵聴けりと。林氏ハ紀州より近年當地に来る。父は林有聲とて、井上文雄、近藤芳樹ニ交際し、短冊多く持てり。有声の父を湾翁、又は百非と号して南画に工なりきとぞ。

○十六日晴　的矢の神社・寺院・古墳等をたづね、午前九時頃すしかを発し、舟にて畦蛸に着。瀬嵜氏を問ひ、相差の古社に大木の楠を見る。枯れて高ハ一丈計にて、木の内部ハ空洞ナリ。六疊敷といへど三疊敷計と見ゆ。濱手に至るに潮高く、道をさゝへ腰のあたりまで水に浸らされバ渉りがたし。寄せ来る涛声凄しく、足をすくはれ海中に巻き入れられなば危しと見えたれバ、野村といふ旅店に宿す。湯ニ浴するになまぬるく心ちあしき事いふ方なし。燈火暗く湯舟も明らかに見えず。垢などむさくるしく覚えければ、水浴びて早々にあがりぬ。外面よりハ広く見ゆれど、いと狭き家にて、下座敷ハ商人の占領する所となりて満席なれバとて、穴の如き天井裏の二階ニ一夜をあかす事となりぬ。この家の妻は的屋（ママ）すしかの妻の妹にて、近村にて有名の美人なりといへど、珮玉時代の鑑定眼にハさのみに映ぜず。おびたゞしきかねの音す。なにぞと問へバ、相差の濱にて竹念佛[2]始まれりといふ。急ぎて畑道を行けバ、濱手の浪防の堤の下の広き所に、一團の人垣なしたり。立寄りて見れど、群集雑沓入るべき所なし。堤に乗りて見おろせば、中央に屋臺あり。その上に僧と白木綿の上下着たる小童二

1　みかんなぎきよなお、伊勢国出身の国学者として有名、伊勢神宮の祠官でもあった。現在の三重県多気郡明和町に所在した斎宮寮の研究を進め、『齋宮寮考證』『齋宮寮廢蹟考』等の著がある。「井上氏旧蔵資料」にはその原本があり、注目される資料である。

2　志摩地方には、「竹念仏」あるいは「笹念仏」とよばれる民俗行事がある。この『国崎のつと』では、相差と国崎で見聞された笹念仏のことがくわしく記されている。近鉄志摩線の鵜方（うがた）駅前にある志摩民俗資料館には、この行事の資料が展示・解説されている。

人ありて、寂滅為楽をさとす問答をなす。いとあはれなる聲にて、文句ハ問答体なれど半分ハ和讃を唱ふるに似たり。この屋臺を中心として、円く列立したるハ上下着て傘をさしたる人々なり。屋臺の軒にもおほくの萬燈をつり（図）中にてカン／＼とかねをうつなり。屋台と傘さしたる人の間をそのかねの緩急によりて五六間もある竹竿の末ニ燈籠を釣りたるを肩にかつき、大勢の若者等屋台の周囲を円形ニ一斉ニはせ回るなり。傘の骨ごとに少サき燈籠をさげたれバ美麗なり。深夜まで如此するなりとぞ。（図）

○十七日朝　相差（ケーサッ）の野村旅店をたちいで、相差の濱より舟を出す。さっと打寄する浪と共に、磯より舟をつき出せバ、舟ハ木の葉の如く大浪にたゞよへり。舟人ハものともせず漕出せり。漸くにして大津濱に着す。舟つきの場処なけれバ、岸につくる迄ハ非常の困難なり。

十七日は旧の十四日にて國崎の笹念佛あり。常福寺[1]本堂前庭の中央ニ大大鼓を据え、その周囲を円形に回りつゝ盆踊をなす。頗珍奇なるふしにて、鈴木主水のくどきなどうたふその聲かなしく、いとあはれなり。二人或ハ四人一組となり、婦人の服粧せる若者あれバ、男装せる女子あり。又一人のみ別に組に入らず異装をこらせるもあり。舞の手は五六の變態に過ぎず。まづ同一の手を繰かへすのみにて變化なし。只一挙手一投足もみたれず。恰も一人にて舞踏するが如きハ、前日より練習せる結果なりと。なかには木剣、ステッキなど打振りて跳（マヽ）る者あり。もし一足節度を誤らば両隣にならべる人の頭面をしたたかに打つべきなり。

夜更るに及びて國崎名物の笹念佛ハ始まれり。細き竹に枝葉のつきたるものを携へ地を拂ふ如き状をなして、かなしげなる声して「極楽の前のビランの木になるがなるなむあみだぶつの実がなる」など一番より十番までの歌を繰返し／＼謠ひ、竹の末につけたる盆燈籠のめぐりにて笹をふるなり。され

1　曹河宗の寺院、井上頼文教授はこの『國崎のつと』の紀行中、当寺に滞在されていたようである。

ど相差の如く活發ならず。足もきはめてそろりに運ばせ、笹も地を拂ふが如く、小手先のみにて動かすに過ぎず。終りに常福寺住職ハ袈裟衣をまとひ、拂子を持ち頭巾をいたゞき、燈籠の前にて喝を唱へ、竹の末にたてたる燈籠を海中に投じて帰るなり。笹念佛の歌の悲哀あるに一番目の歌のみ内容の陽気なるは産土神の御心にやあらん。一番　チーハーヤーブール　カァーミィーノー　イーガァキィニァーツーウーエーテェー　ニァツゥモロートーモーニ里もサカーエールゥ

○廿八日晴　午前八時頃國崎を発し石鏡[1]に向ふ。道路険悪なり。國崎役場の小使に荷物をかつがせ、石鏡の小脇寿仙氏を問ひ、鏡浦村石鏡二百二十九番地臨済宗湖月庵[2]ニ至る。こゝはこの村の役場にて、木村五郎吉・山本茂八・木村寅吉の三氏あり。先古墳・古跡の事を問ふに、木村寅吉氏の談に、當所富山の嶺に経塚あり。それより上方に本磯山（モトイソヤマ）といふ山あり。小字土俵場とて、旧藩主の時[3]砲臺[4]を築きたる地あり。その附近を廿七年の頃畑地に開拓すとて石窟を穿てりといふ。その地道案内を乞ひたるに、迷惑相なる顔つきにて、急用を思ひ出したりとてあはてゝ外出するさま気の毒にも滑稽なり。木村五郎吉氏は進んて案内せんとて役場を出づ。小脇寿仙氏ハ老年にも不關、杖つきて共に山路に昇る。小山の巓に寛永三年と刻める墓碑あり。こハ円鏡寺の僧某、死後も此所にありて山青海紫の風光を見たしと遺言せるに依れりと。砲臺に至るに鐏・平瓮の破片数枚を得、五郎吉氏は石廓のありし所を忘れたりとて遂に見當てざりしハ口惜しかりき。山を下り、舟にて石鏡を発し本浦[5]に着く。舟中にて東京深川霊岸町四十六神谷清堂門人志摩國迫子（ハザコ）なる岡野松琴と云ふに會す。同氏は佛國に行きて工学電気術修めん為故郷ニいとまごひに帰れる也と。年は廿二三と見えたり。

○廿九日晴　今浦[6]区長花井市太郎と花井彦四郎の両人にて舟をあやつり、権現山の隣の山の中腹ニ昇

1　いじか、鳥羽市石鏡町、国崎の北方約四キロを距てた太平洋に面する集落。2　臨済宗の寺院。3　中世に志摩半島一帯を支配していたのは、水軍の歴史と共に知られた九鬼氏であり、その根拠地は鳥羽であった。豊臣秀吉の下で活躍した武将として九鬼嘉隆が知られている。代がかわって丹波国綾部・摂津国三山に分封された後、代々譜代大名がつづいたが、享保一〇年（一七二五）下野国烏山より稲垣昭賢が鳥羽藩主として入封以後明治維新に至った。4　沿岸防備のため各所に砲台が築かれたようである。5　ほんうら、鳥羽市本浦町、石鏡の西方約四キロ、生浦湾に問した集落。6　いまうら、本浦の西北につづく集落。

る。道険阻にして登るにやすからず。中腹に石廓あり、壁二壁敷計なり。

（図）

天井石の中間を取り去りたれば、入口よりは天井より入る方便利なれど、荊棘蔓生して入るべくもあらず。奥の方に土器見ゆれど取る事能はず。後の方にて朝鮮土器と人類学者の称するもの数枚を得たり。石廓の入口の方には青白きクスリのかゝりたる祝瓶[1]数片散乱せり。同一古墳にて新古年代の不順序なるものハ志摩の古墳ニ多し。[2]最も研究すべきなり。こゝより山を下り、又舟にて権現山尾の方に字トヤと云ふ所あり。こゝのは平地ニ六尺ニ幅三尺計の穴を穿ち、底にはセメントを厚さ五分計の板の如く敷きつめ、左右ハ大小の石ニてたゝみ奥と口ニハ大石をふさぎ、天井はひらたき石を横にならべたり。石廓と他の石廓とならびたる間ごとに丈三尺計の炭を埋め立てたり。平地より一寸程あらはれたるが多し。六尺の間に此の如く柵を立てたるが如く竪に埋む。併べたるもあれハ不規則に如此もあり。

（図）

こゝにも副葬品新古雑糅せるがごとし。ひとつ石廓内より年代の懸隔せりと見ゆるもの多く交れり。按ずるに子孫の此の地に存在して祭祀の絶えざりし程ハ、年々石廓の口石をはつして祭器を取りかへたる事ありしならん。玉田宿祢の遠祖武内宿祢の石廓内に陰れたる事も國史に見え、出雲國　郡塩谷村石廓内の石棺[3]は（図）外面より祖先の形骸を伺ハすべく造られたり。黒色の廉雑極まる平瓮と堅牢硬緻なる紫色の祝部と共に同じ石廓内より出で、又表面裏青海浪ノ形或ハ高麗の櫛目形ありて、一見千古のものと今より二三百年前宇爾にて焼きたる土師七分ニ陶三部ともいふべき廉悪なる品[4]と交りて出づるあり。よく〳〵研究をつくすべきなり。

なま〳〵の人類学者・考古学者ハ、某古墳の前にて瓢玉時代第何期の土器を得たり。さればこの墳ハ

1　古く祝部土器とよばれていた、いわゆる須恵器。「青色キクスリのかゝりたる」と記されているが、自然釉である。

2　一つの古墳、とくに後期古墳の横穴式石室の副葬品として、時期の異った土器が出土することは、全国各地の古墳で見られることであり、今日の考古学では常識となっている。志摩地方の古墳の実態から、この現象をとらえておられるところが井上教授の見識である。

3　現在の島根県出雲市上塩冶（えんや）に所在する、上塩冶築山古墳のことである。出雲国のあと、二字が抜けているが、旧地名でいえば簸川郡である。

4　宇爾（うに）は現在の三重県多気郡明和町の地名。この地で近世に瓦器の生産の行なわれていたことを筆者は知らないが、古代に土師器の生産が行なわれていなことは最近における発掘調査で明らかになっている。

何年以前のものなり。某古墳の後にて何々を採拾(マヽ)せり。依て直刀時代の中期なりなど学を拮すが如く論ずれど、同一の石廓内ヨリも新古雑糅の観あるものゝ交れるがあれば、内部まで充分調査を遂げたる上ならでは、その附近より得たる一片や二片の土器を見、一顆や二顆の玉類を得て何々式なれば何年以年(マヽ)なりなど、得々論ずるハ當らぬ事にて、大に事実を誤ることあらん。妄ニ辨断を下すが如きハ甚歴史を害するものなり。

解説　『國崎のつと』は、神宮皇学館の名の入った野紙八枚が使用され、毛筆、おそらく矢立用の小筆で書き綴られた文章である。一枚目の冒頭に「國崎のつと」と記され、二枚目から本文が始まっている。日付は十二日晴からはじまるが文章はなく、次の十三日から書き始められている。以後十四日・十五日・十六日・十七日とつづき、あとは廿八日・廿九日となっている。これが十八日・十九日の誤りであるのか、日を隔てていたのかは文面だけでは判断できない。

ところで、この『國崎のつと』がしたためられたのがいつのことなのか、本文中には記載が見られない。これを傍証する資料としては、『井上氏旧蔵資料』の中に「明治卅五年ヨリ卅七年珮玉時代参考資料第壱號」という綴の中にある一通の書簡で、それは「在北都浮雲子」と名乗る人から教授に差し出されたものである。その宛先が「三重縣志摩郡國崎、常福寺にて、井上頼文先生」となっている。差出日は八月六日で、志摩的矢局の消印が押捺されているが、その日付は卅五年八月九日となっている。これから考えると、このころ教授は比較的長期にわたって国崎に滞在されていたのではないかということが考えられ、それが明治三十五年であったことがわかる。

国崎は〝くざき〟と訓み、当時においては三重県志摩郡長岡村大字国崎、現在の鳥羽市国崎町である。志摩半島の中央部、太平洋に面する古くからの漁村で、現在はパールロードが開通し、観光地として脚光を浴びている地域である。『大日本地名辭書』には次のように記されている。

今長岡村と改称す。東は外洋に面し、海岸暗礁多し、国崎相差の二大字に分る、相差の南岬を菅崎と曰ふ、的矢湾口の北角に当る。○国崎相差は潜女の名所にして、之を伊勢蜑と称し、伊勢神宮へ年々鮑を進献する事、三国地誌に見ゆ。倭姫命世記曰「島国国崎島鵜倉慥柄等

島に朝御饌と詔て山貴潜女等定給」神宮雑例集国碕神戸に作る。

と記されている。神宮にゆかりの深い土地であり、海女による鮑取りは現在もさかんで、神宮に供進するノシアワビの調製はこの国崎で古式によって行なわれている。また国崎町には志摩潜女（かつぎめ）神社がある。

〃つと〃は漢字で書くと「苞」、〃いえづと〃ということばもあり、みやげといった意味で使われたのであろう。

以下、本文に従って行程をたどって見ることとする。

十三日　○磯部に行くため、山越え海岸沿いで相差（おうさつ）を経て畦蛸（あだこ）に至る。

○畦蛸の瀬崎文右衛門・楠太郎氏を訪れる。

○西明寺で時頼と称する木像を見る。

○山越えで堅子（かたこ）に至り、千賀（せんが）の渡を渡る。

○千賀の阿弥陀堂を訪れる。

○堅子の宝珠庵を訪れる。

○磯部上之郷で赤坂直次郎・谷川清吉・南太郎氏を訪ねる。

○伊雑宮（いぞうのみや）に参拝する。

○穴川佐義長神社に参り、米奥覚三氏を訪ねる。

○伊雑宮前の旅店に泊る。

○赤阪・南両氏を訪ね、谷川清吉氏を共に米奥覚三氏を再訪する。○安心庵に行く。

○小河江（おがい）、鳥居氏の旧墓地に登る。

○舟で的矢（まとや）港に着き鮎嘉で休憩する。

○舟で安乗（あのり）に着き国分寺に行く。国分寺に泊る。

十五日

○国分寺で所蔵の遺物を見る。
○甲賀（こうが）を経て志島（しじま）の海蔵寺に行く。
○村役場で柳沢豊助氏に会う。
○柳沢氏の案内で志島で遺物を所蔵する家々を回る。
○国分寺に帰って昼食。
○舟で渡鹿野（わたかの）に渡る。
○舟で的矢に着き、鮎嘉に泊る。

十六日

○的矢の神社・寺院・古墳をたずねる。
○舟で畦蛸に着き、相差の古社で大木の楠を見る。
○相差の浜で竹念仏を見る。

十七日

○相差より舟で大津浜に着く。
○国崎の笹念仏を見る。

廿八日（十カ）

○石鏡（いじか）に向う。
○小脇寿仙氏を訪ね、湖月庵に至る。木村五郎吉・山本茂人・木村寅吉の三氏に古墳・古跡のことを聞く。
○本磯山の古墳跡を見るため山路を登る。
○舟で本浦（ほんうら）に行く。

廿九日（十カ）　○今浦（いまうら）に行く。
　　○権現山の隣の山に昇る。

大体、以上のような行程であるが、八月十三日から十九日に至るまでの八日間、国崎を起点として、現在の行政区画でいえば、鳥羽市・磯部町・阿児（あご）町などの地域を精力的に踏査されている。文中に見られるように交通の開けた現在とちがって、道路事情も悪く、徒歩又は舟船でなければ行けないといった状況の中で、これらの地域に所在する遺跡とその出土遺物をたずねるのが主たる目的であったことがわかる。

また、各地で登場する人物は、そうした遺跡、主として古墳であるが、それを見聞している人びとであり、出土遺物の所蔵者であることがわかるが、こうした人びとを逐一訪問して、知識なり資料なりを得ようとされる教授の真摯な姿勢を窺うことができるのである。

『國崎のつと』の紀行は、ちょうど八月の旧盆をはさんでの日程であり、本文中には、相差での竹念仏と、国崎の笹念仏のことがくわしく記されているが、民俗行事の記録としても重要であろう。

なお、本文の下に注を付した。井上教授の足跡をそのままたどったわけではないが、数回にわたって現地を訪れて知り得たことを中心に作成したものである。とくにこの作成のためには岩谷奈津子さんに負うところが大きい。

本稿の末尾に『國崎のつと』の原文を図版として掲載した。文中に井上教授によって描かれたスケッチがあり、それをそのまま紹介したかったからである。参照されたい。

二見の古墳墓

本年四月下旬、度會郡二見町[1]二見浦驛[2]附近に於て、古墳を發堀し、刀劍の断片土器等を發見せしとの模様を聴き、祖先崇拜に觀念薄く、無意識に破壊轉潰し去るの亡状を慨し、将来の覺悟を促す必要を認めしと、二見町有志の希望とにより、五月五日、二見町に赴き、小學校に於ける講話前に、實地踏

1　現在でも同じく三重県度会（わたらい）郡二見町である。2　国鉄、津と鳥羽を結ぶ参宮線の駅、「ふたみのうら」と読む。

査をなすことゝせり。

先づ第一に發堀(ママ)せしと云ふ、二見浦驛の眞額に屏列せる北浦山の半腹に攀ち登りしが、果樹栽植の為め開墾せし赭土、新しき炎陽を匂はし、疊みなしたる扁薄石の、算を乱して打ち捨てられしが、胸の皷動を著しく昂めたりき。脚下に、二見浦驛を瞰視し、寸馬豆人の清渚を往来する光景面白く観らるる絶勝の境、唯見る東西十三尺余、南北八尺、深四尺五寸を有し、総体に、二見西堂山産（江村堅田神社の東）の淡藍扁薄石なるが、大いなるは半疊敷、小さきは一尺五寸程にて、厚二寸五分内外の良材を以て、壮厳の構造を營まれたり。東側北側は大石を樹て並べ、南側は下部に小石を樹て並へて上部は横石に積み上げ、墻(ママ)壙内東側三尺余の間石疊を敷き詰め、高さ天井に達する中仕切をなし、右方一尺五寸程の處には別に引窓の如き一枚石と、其前に、數層の石壇形状あり、天井は一面大扁薄石にて支え蔽ひ、西部は小石を積みて入口を作られたるものゝ如く見ゆるに、折柄来会したる発堀(ママ)者の言に質して、尚、発堀(ママ)當時の實況を聴けば、

當地にかゝる古墳ありとも知らず、果樹を植付くる為め、開墾中、巨石に堀り當てしより、力を尽して、崩壊したる天井石及土を取除き見れば、次第に此の如き有様となり中仕切の入口と創しき石壇の前に方り、一口の劔状横はり、入口の内部に　と　と、其外部にて　と　と を発見したるが、中仕切及石疊石壇入口は現状の如く破壊し、土塊は西の谷へ掻落して如此なれり。されど中仕切及石疊石壇の形状は確に記憶し居るを以て、復旧するは容易也。

と。實にや、壮美なる石材の結構と、異彩ある壙内の装置とは、尊重すべき貴族の墓塋たるべしと想像せられき。尚、掻落したる土塊中より刀劔の碎断片を拾得せらるゝを見れば、他に何等かを覓め得らるゝ心地す。金環銀環劔具装身具等は一も發見する所なかりしと發堀(ママ)者断言し居れるが、土器の欠損部分に古色の歴然たるを以て見れば、或は以前之を發堀(ママ)し去り、破損せしものゝみ遺棄したるには

非らざるか。地は大字三津區の北浦山にして短小なる雑木疎生し居り、東西北の三方直立の急坂峻に南の一方重疊せる積翠を負ひて波光を受く、高凡尺の山腹に在り。

茲處を東に距ること凡町余、鉄道線路に沿ひて隧道入口を右に外れ、屹立せる池ノ奥山の横腹より背に亘りて攀登すれば、稍勾配ぬるき小頂の矮松間、一条の樵路に方りて、無残にも発堀(マヽ)されたる一壙墳あるを示されぬ。こは北浦山の後に、三津區民の試に発堀(マヽ)せしものにして、土器二三と環状様のもの一二とを得たりと云へるが、猶他に、何等か遺存せしものなからでやは、この壙墳の結構は、北浦山のより稍大きく、東西十五尺六寸、南北七尺八寸、深四尺にて、北位に入口あり、石材は當山産出の雑石を用ゐ、結構頗る粗野にして、中仕切なし。池ノ奥山を辷り下りて、江山の裾を北に縫ひ、堅田神社[1]を過ぎりて、直に東側の子ケ山西麓に到りぬ。茲處は、(二見町の首脳地江村領にして花時壮観なり)昨四十四年五月、国母陛下[2]行啓の砌、道路修繕の土採場となしたる為め、心なき人夫の鶴嘴に堀荒されしが、劔及土器の破片を発見して、興玉神社[3]に保存しあり、壙墳は今、北側の一部のみ僅に残れるも、何等考証に資すべきものを認め得ず。想ふに、池ノ奥山と同し石材、同し結構にて、粗野なりと虽。中仕切と覺しきものあるは、北浦山と同形式の如く見ゆ。三者各其結構を異なる点を、完全に保存されなば、多大の貢献を人類学上に効すべからしをらんと痛嘆せられき。尚、北浦山の西、東山の一角に、枯松と称する處ありて、伊勢三郎義盛の甲冑を埋めたりと云ひ[4]、又、黄金の鶏を埋めたりなど傳説しつゝあるが、古墳発堀(マヽ)熱に心うきたる三津區民は、枯松(今は一古松存す)附近を掘り試みしに、二三の土器を得たるのみにて、古墳の如きは之なかりしと語り合へり。

又、三津區字里中なる、三津區長奥野藍之助氏宅地に接續せる、八百三十二番、八百三十三番、八百三十四番の藪地を、昨四十四年八月開墾せし時、八百三十二番に於て発掘せし壙墳は、長二間半余、巾五尺、深五尺を有し、入口と覚しきは西南位に認められ、土壌は附近一面微塵砂にして、石材は本

1　国道一六七号線に沿う二見町役場のすぐ南側にある。『勢陽五鈴遺響』度会郡の項に、「立石茶屋村ヨリ立崎ニイタル松林ノ中ニアリ路ノ右ノ旁ニ詣人ノ便ニ遥拝所アリ本社ハ路ヨリ一町許西ニアリ三津村ニ属セリ或ハ堅田ニ作ル内宮廿四社ノ摂社ナリ……」と記されている。

2　明治天皇の皇后、昭憲皇太后のこと。

3　夫婦岩で有名な立石崎にまつられている。

4　『勢陽五鈴遺響』に、この伝承がくわしくのせられている。

邑東南の前山に散在せるものたり。天井石は長弘定まらず、大なるは一個七八十貫の自然石にて、他は二三貫乃至五六貫の雑石を積み疊みしものゝ如く、壙中よりは、劒の断片、鍔、土器等多数発見せられしも、貴重品は悉く従業人夫の携え去るに任したれば今は、慶春庵[1]及二見小学校に寄附せる土器のみなり。然して、八百三十三番の発掘石材は土抱に使用され、発掘品の所在定かならず、八百三十四番には確に一壙墓の在るを認められたるも、未だ発掘せすして現存せり。奥野區長の言に據れば、研究に資すべくば、鄭重に発掘して発見材料を提供するも差支なしと。

又、同區字里中、西口郡太郎氏宅地接續の藪跡より、近頃　一個を発掘されたるあり。

由来、江村區三津區には、古墳砦趾の傳説地多く、三津區の内座山よりも、往年、古土器等を発見せし事あり、江村區と三津區との領堺なる、南浦山にも石窟を存して、神秘の鍵未た人の子に附与せられず。當町は、郷土神佐美都日女、佐美都日女を始め、一族末葉の墳塋多かる可きは疑ひなく、今後或は、有力なる徴證を得る事あらむと想像せらる。

左に、発掘されたる諸品の稍完全なるものを紹介せむ。

1　三津慶春庵所蔵遺物の図が「井上氏旧蔵資料」の中にある。おそらくこの時教授によって作成されたものであろう。

解説　『二見の古壙墓』は、これも罫紙九枚が使用され、墨書の原稿である。冒頭に記されているように、三重県度会（わたらい）郡二見町、国鉄参宮線二見浦（ふたみのうら）駅の付近において古墳が発掘され、刀剣の破片、土器等を発見されるということがあった。発掘といっても、学術的な調査ではなく、地元の人びとによって行なわれた興味本位の、いわば乱掘であったようである。これがきっかけとなって、地元二見町在住の有志が井上頼文教授を招聘し、講演会を開催したが、同町の小学校で行なわれる講演に先立って実地踏査をされたのであり、本文はそのリポートとして作成されたものであることがわかる。文中に、「昨四十四年八月」とあるから、明治四十五年（一九一二）のことである。

国鉄二見浦駅は、夫婦岩で有名な二見海岸の南方にあり、東方から南方にかけて、名峰朝熊（あさま）山から派生した、標高二〇〇㍍～六〇

屏の山丘が起伏する平坦地の中央にある。文中にたびたび出て来る三津（みつ）の集落は、駅の西南方に位置している。

『全国遺跡地図　三重県』または『三重県遺跡分布図』によると、三津古墳群・山田原古墳群など、二見町には現在計二五基の古墳の存在が確認されているが、過去にはかなりの数の古墳が存在したと考えられる。開墾や木材の伐採等に伴って破壊・消滅した例も多いのであろう。

井上教授が実見され、文中に記されていく古墳は五カ所で、いずれも横穴式石室を主体構造とする後期の古墳である。各古墳について、現地をたずねて見ることを試みたが、樹木や荊刺が生いしげり、登る道が見つからないといった現状で、断念せざるを得なかった。当時は古墳はもとより、文化財全般にわたって今日のように行き届いておらず、考古学についてまったく知識のない人びとによって乱掘され、出土遺物も現在となっては散逸して了っているが、発見当時いち早く現地に赴かれた井上教授のこの一文によって、片鱗ではあるが記録としてのこされたことは、不幸中の幸であったということができる。

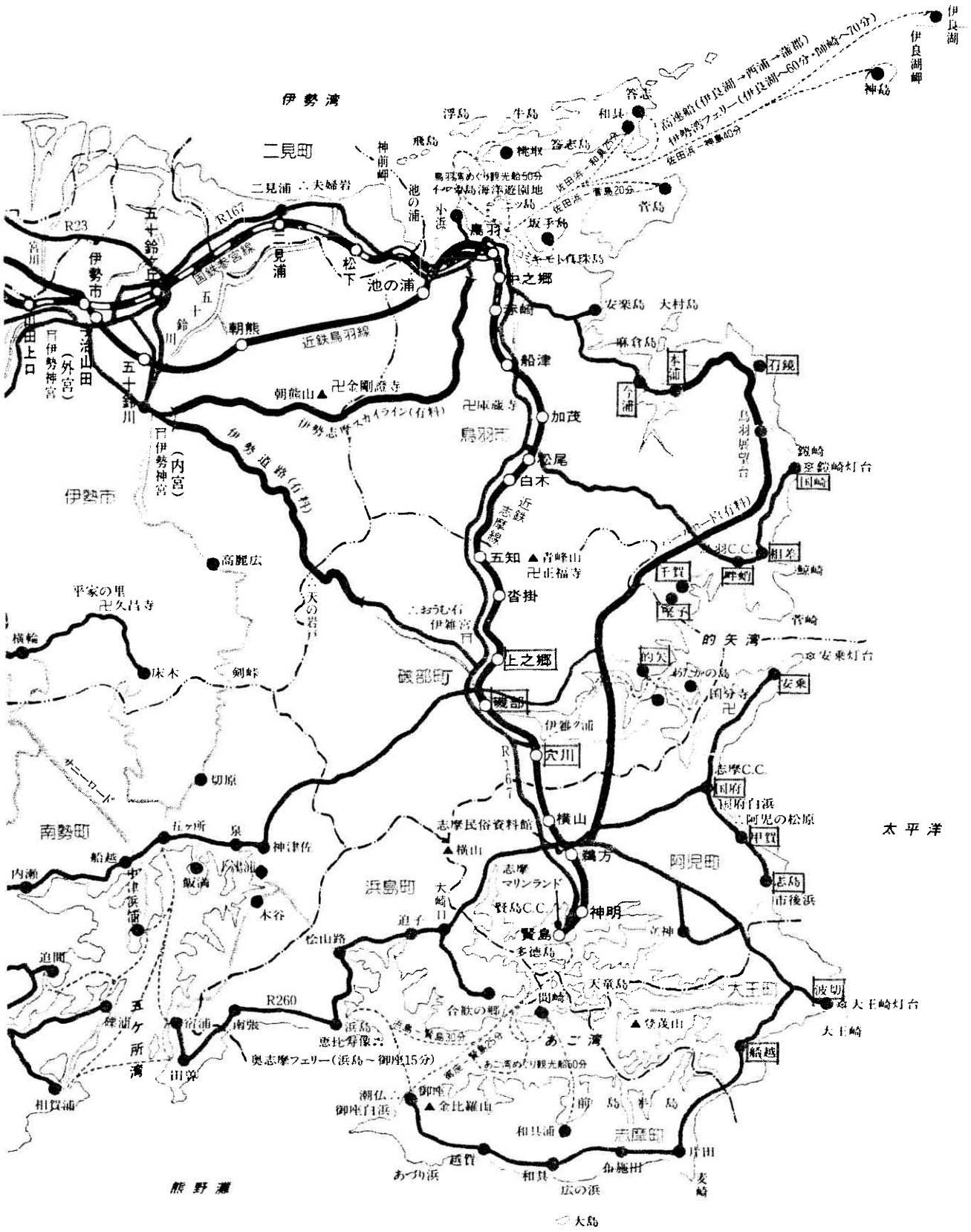
なお、「古墳墓」という字句が使用されているが、墳も墓のどちらも墓穴とか墓地という意味を持っている漢字であり、「古墳」と同意語として使用されたのであろう。

これも、末尾に本文の一部と、この実地踏査に際して描かれたと思われるスケッチがのこされているので図版として掲載した。

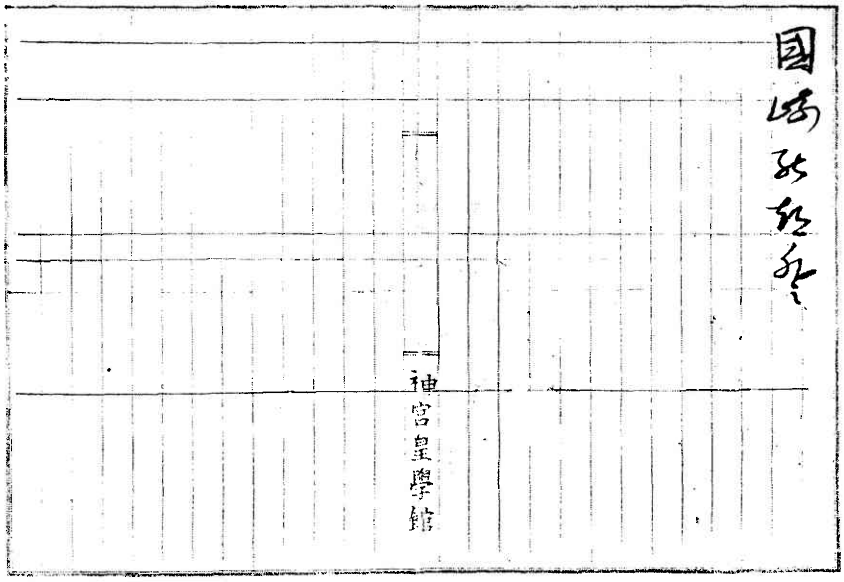
あとがき

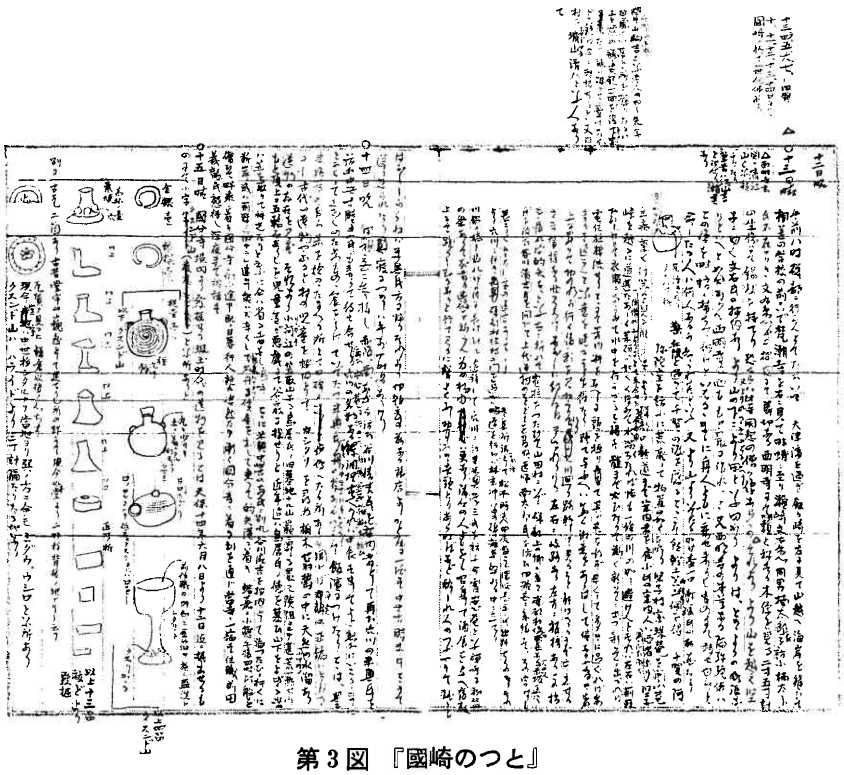
前稿と同様、本稿の作成に当たっても、資料の自由な調査と発表を許していただいた、大手前女子短期大学の佐藤直市教授と、卒業論文の課題として、現地の踏査・資料の収集と整理を進めてくれた史学科一六期生岩谷奈津子さんの助力に対し、感謝の意を表する。

第1図　井上頼文教授の描かれた志摩の絵図

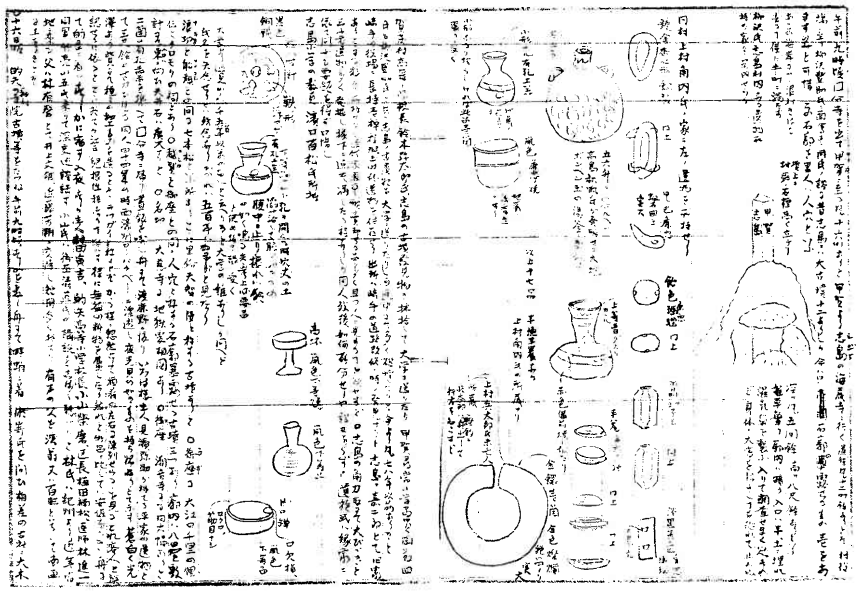


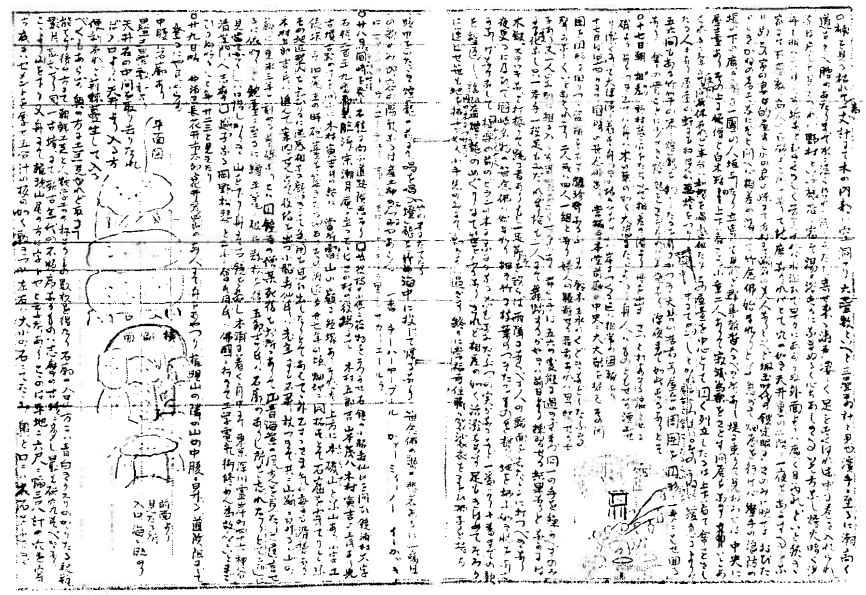
第2図　現在の志摩地方（近鉄パンフレット）

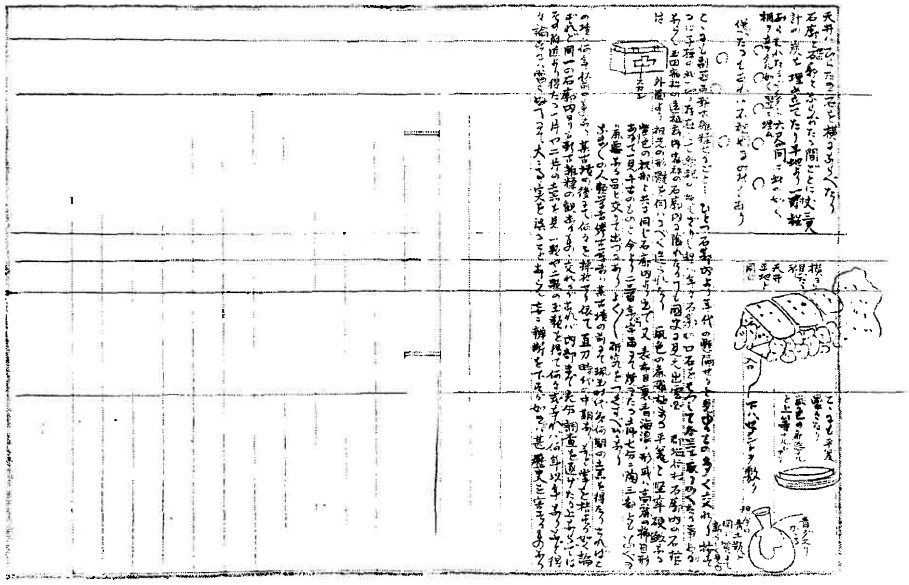


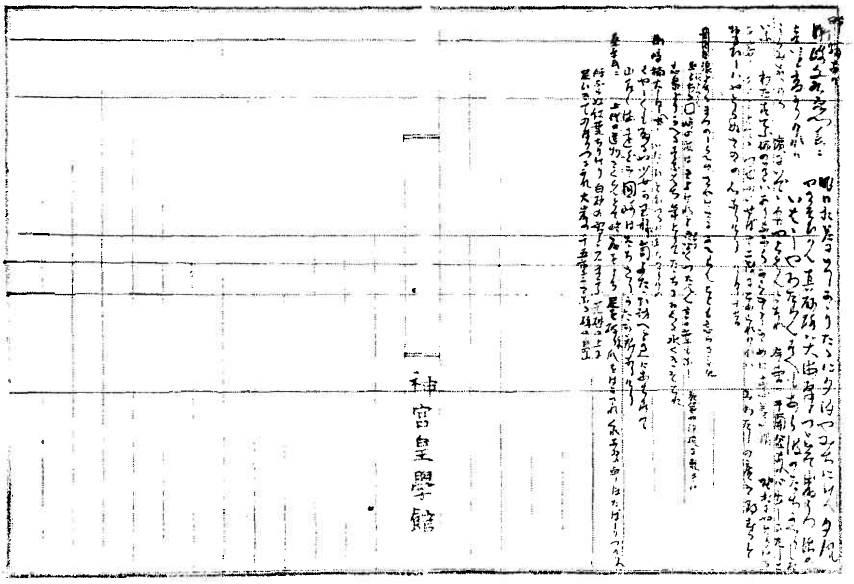


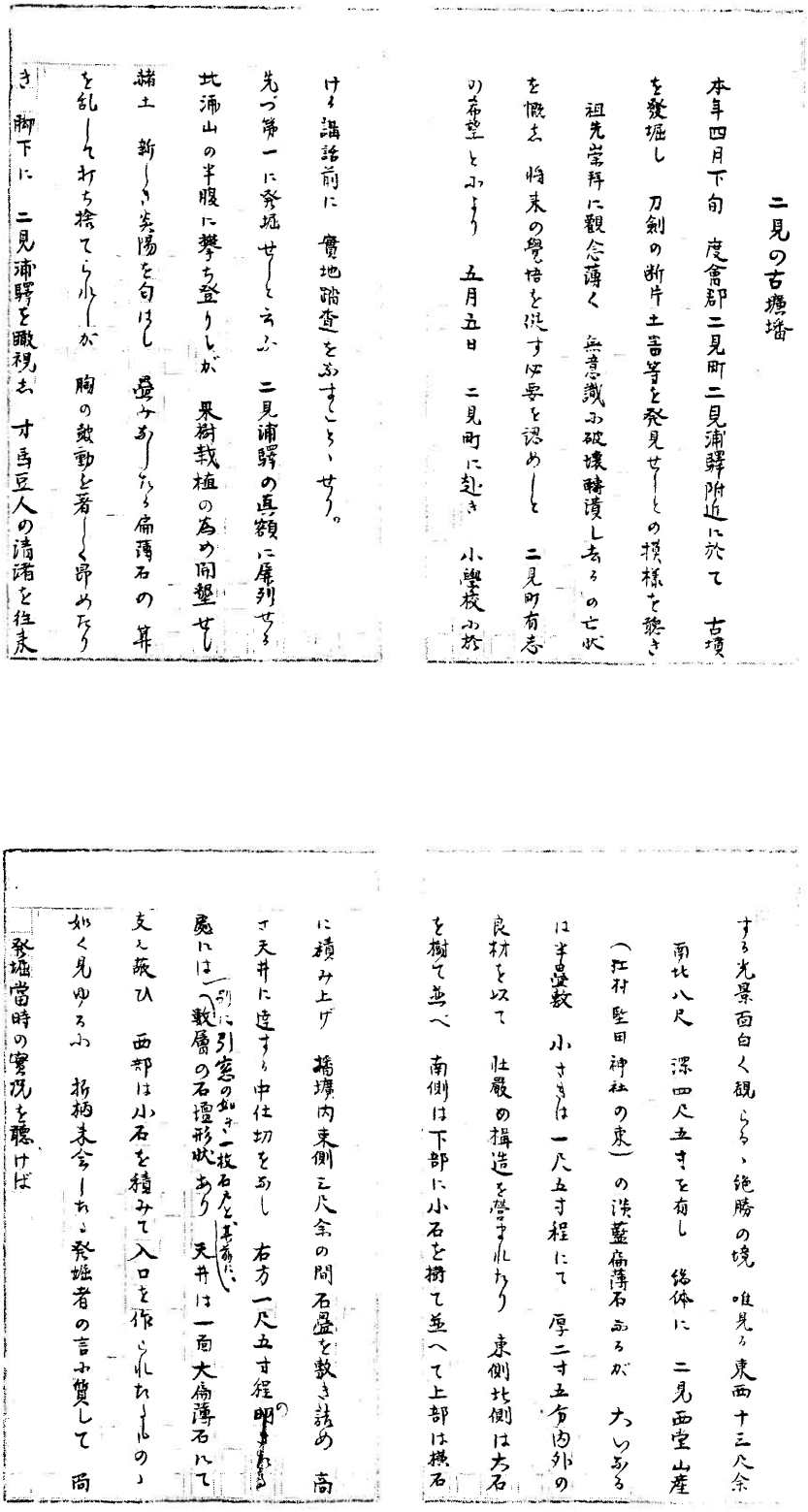
第3図 『國崎のつと』








神宮皇學館



二見の古墳墫

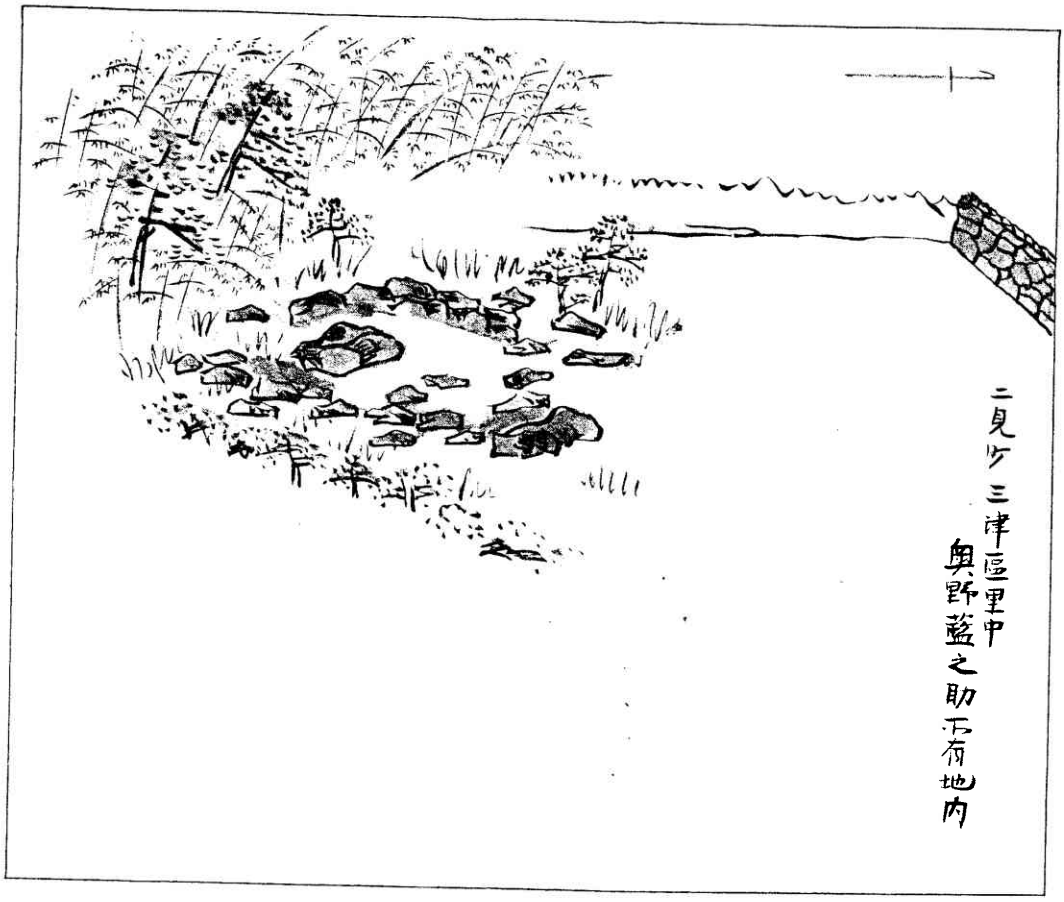
本年四月下旬　度會郡二見町二見浦驛附近に於て　古墳を發掘し　刀劍の断片土器等を発見せしとの様子を聞き祖先崇拝に觀念薄く　無意識に破壞轉潰し去るの亡狀を慨し　將来の覺悟を促す必要を認めしと　二見町有志の希望とにより　五月五日　二見町に赴き　小學校に於け る講話前に　實地踏査をなすことゝせり。

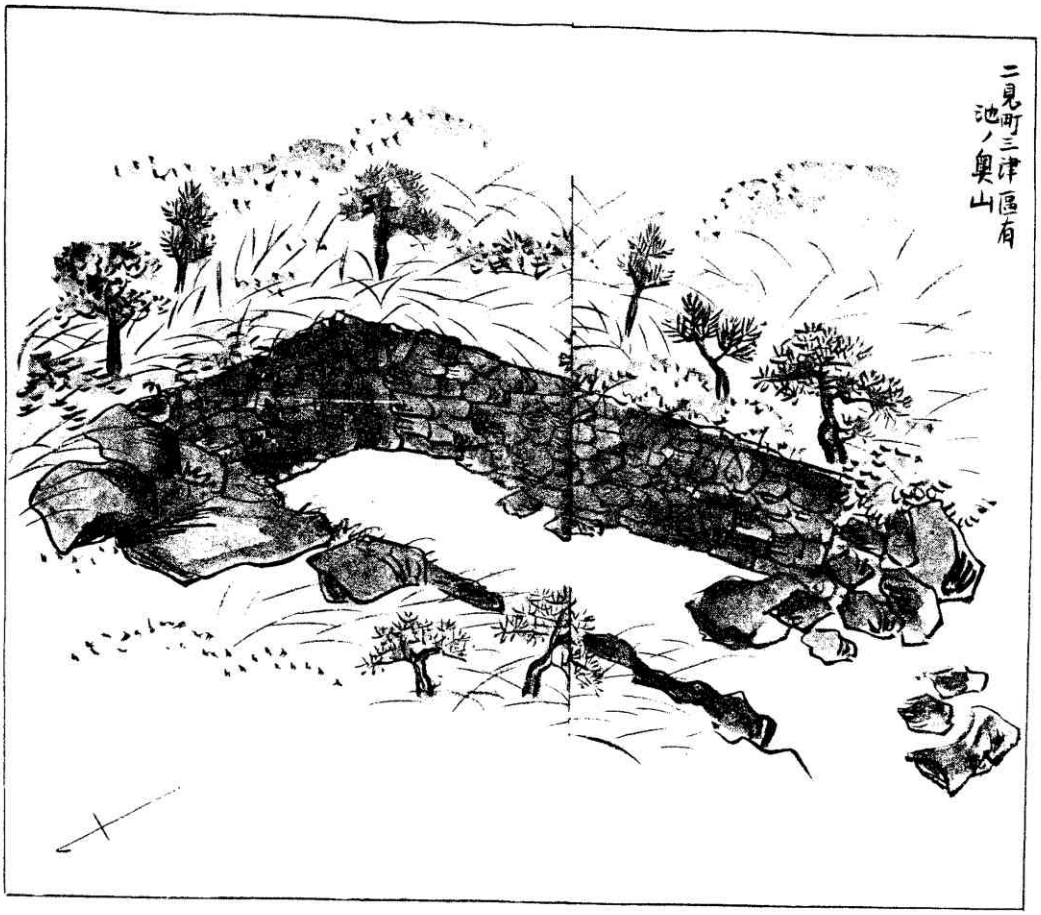
先づ第一に發掘せしとゝふ　二見浦驛の眞額に展列せる北浦山の半腹に攀ぢ登りしが　果樹栽植の為め開墾せし赭土　新しき炎陽を白ほし　疊み重ねられる扁薄石の　幾を乱して打ち捨てられしが　胸の鼓動を著しく昂めたり

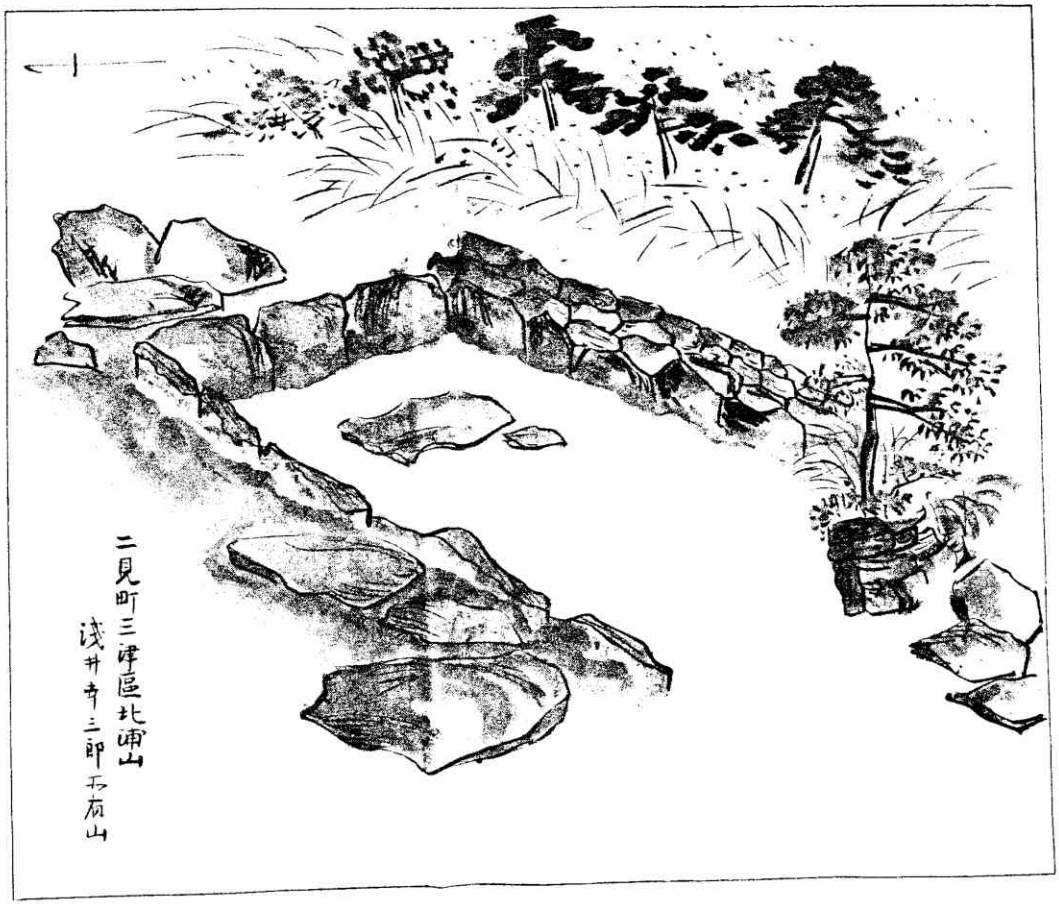
き　脚下に　二見浦驛を瞰視し　才色豆人の清潔を往来する光景面白く觀らるゝ絶勝の境　唯見る東西十三尺余南北八尺　深四尺五寸を有し　俗体に　二見西堂山産（江村　堅田神社の東）の淡藍扁薄石なるが　大いなるは半畳敷　小さきは一尺五寸程にて　厚二寸五分内外の良材を以て　壯麗の構造を誇すれり　東側北側は大石を樹て並べ　南側は下部に小石を樹て並へて上部は横石に積み上げ　墫壙内東側三尺余の間石畳を敷き詰め　高さ天井に達する中仕切をなし　右方一尺五寸程の所には（別に引窓の如き一枚石を其前に）數層の石壇形狀あり　天井は一面大扁薄石にて支え蔽ひ　西部は小石を積みて入口を作られしものゝ如く見ゆるふ　折柄来合せる發掘者の言ふ賀して　尚發掘當時の實況を聽けば

第4図　『二見の古墳墫』（冒頭の部分）

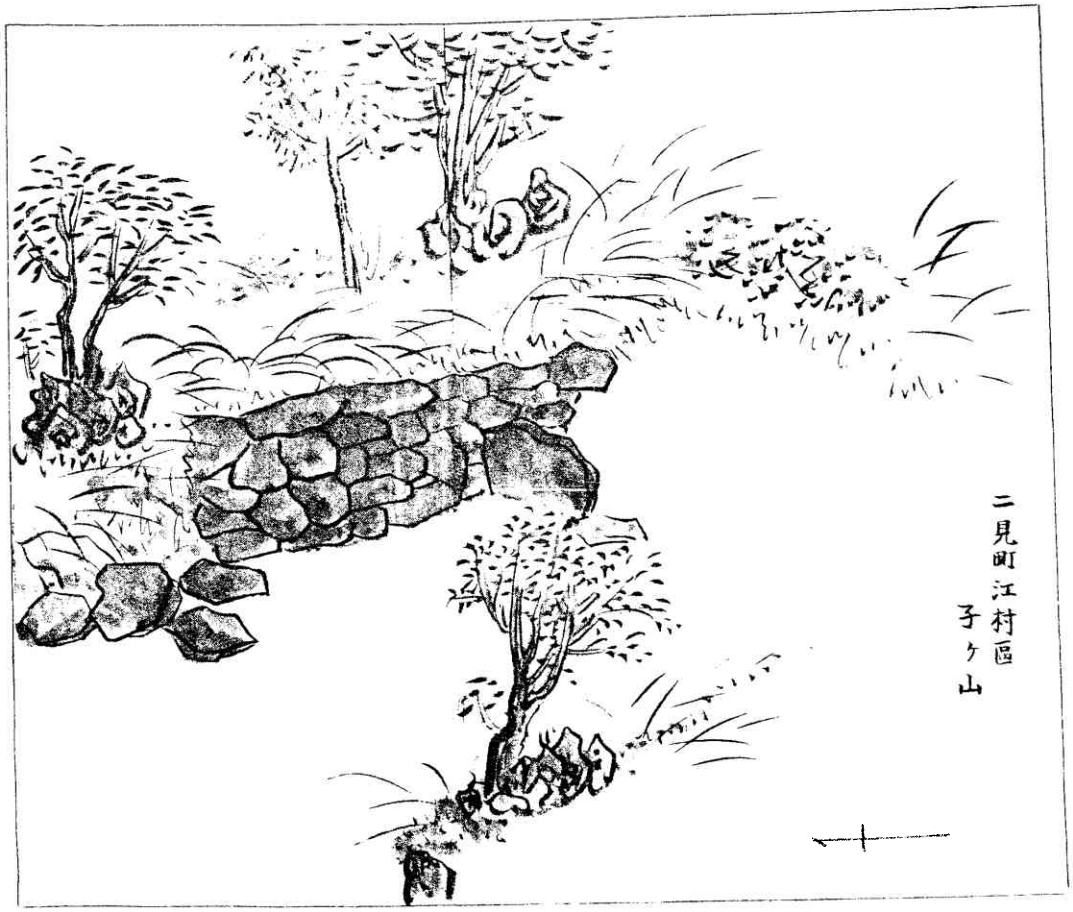
第5図『二見の古墳墓』（附図、井上頼文教授画）







二見町三津區北浦山
浅井幸三郎氏有山



二見町江村區
子ヶ山